唯識論義「無間解脱同断一障」の論理について

―附『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究

―「別要」教理篇上』の校正漏れ修正―

後藤康夫

【要旨】

昨年（二〇二二年二月）龍谷大学仏教文化研究叢書四八として『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』（法蔵館）が上梓された。同書は身延山大学図書館所蔵の『唯識論尋思鈔別要』（『尋思別要』）を底本として、大谷大学図書館所蔵『尋思別要』・龍谷大学図書館所蔵『尋思別要』を対校本とし、適宜各大学図書館所蔵『唯識論尋思鈔』（『尋思鈔』・『尋思通要』）等々を参照して、『尋思別要』巻一の翻刻・読解を行った書籍である。これは龍谷大学教授の楠淳證氏を主編者兼著者とし、筆者は編者及び著者の一人として幾つかの論義テーマを担当している。編者の一人として校正にあたっているものの、若干の校正漏れが判明した。無論、これは他の編者・著者に関係のないことである。今回、本稿では校正漏れ修正と共に論義テーマ「無間解脱同断一障」に関して若干の考察を行うものである。「無間解脱同断一障」とは、唯識教学において煩悩を断じ仏果に至る上で十地等各修行階梯に四道（加行道・無間道・解脱道・勝進道）を設ける中の二つを指していて、無間道とは間隙なく煩悩を断じる段階、解脱道とは煩悩を断じて理を証する段階のことである。無間・解脱二道は同様に断惑するものの、中国唯識において「同断一障」について金剛心位の菩薩を等覚と見なすのかという「等覚」の位置を含めて、玄奘（六〇〇［二］～六六四）門下基（六三二～六八二）と同門の円測（六一三～六九六）の見解に対し、基の直弟子慧沼（六四八～七一四）や基の法孫智周（六六八～七二三）間の見解が異なっていた。そのため伝来先の日本では『尋思別要』において不整合性等々の課題について蔵俊（一一〇四～一一八〇）の解釈を示しながら貞慶（一一五五～一二一三）は慧沼と智周の見解の相違を指摘した後、末学迷惑の義を遮すと提示している。ここに『尋思別要』収載の意義の存したことが明らかになってくるものである。

【キーワード】 貞慶　蔵俊　唯識論尋思鈔別要　成唯識論同学鈔　成唯識論了義灯　成唯識論演秘

目次

一、はじめに
二、唯識における菩薩修行のありよう
三、論義テーマの展開①―『同学鈔』の解釈
四、論義テーマの展開②―貞慶の思索
五、むすび
六、附　修正

一、はじめに

昨年（二〇二二年二月）龍谷大学仏教文化研究叢書四八として楠淳證教授を主編者兼著者とする『唯識論尋思鈔別要』（以下『尋思別要』）の翻刻・読解の研究書『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―別要 教理篇上』（法蔵館）が上梓された。筆者は共編者兼著者の一人として幾つかの論義テーマを担当している。

日本での唯識教学には中国僧等先徳説に従うのみならず、自ら新たに解釈するということが伝来以来行われてきた。『尋思別要』においても蔵俊等先徳に準じながらもそれのみに止まらず自ら教義的に歩を進めている点が随所に見られる。今回、他の研究者の担当した論義テーマは言うに及ばず、筆者の担当した論義テーマでも興味深い展開が図られている。その中で、改めて論義テーマ「無間解脱同断一障」を取り上げて貞慶の解釈を若干記してみたい。合わせて、『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―別要 教理篇上』に共編者の責として少し校正漏れがあったため、若干の修正も行うものである。

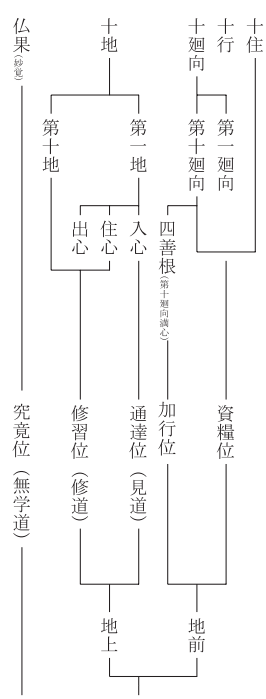
論義テーマ「無間解脱同断一障」の「無間解脱」とは、唯識教学において煩悩を断じ仏果に至る上で十地等各修行階梯に四道（加行道・無間道・解脱道・勝進道）を設ける中の二つをさしている。加行道とは煩悩を断じようとして修行を行う段階をさし、無間道とは間隙なく煩悩を断じる段階（無間道の「無間」には、理を観じること「無間」と惑を断じること「無間」の二義がある）のことで、解脱道とは煩悩を断じて理を証する段階（惑の麁重を除き体自在である点と所証の理は離繋である点の二義がある）のこと、勝進道とはさらに禅定・智慧を磨く段階のことで、菩薩の修行階梯にはこれらがみな揃っている。このうち無間・解脱の二道は同様に断惑するものの、中国唯識において玄奘（六〇〇［一］～六六四）の門下基（六三二～六八二）の兄弟弟子にあたる円測（六一三～六九六）の見解に対して、基の直弟子慧沼（六四八～七一四）[1]や基からは法孫にあたる智周（六六八～七二三）たちとの見解が異なっていた。そのため伝来後、教義的に整合性がある解釈を求めていた日本の僧たちにとっては看過し難い論義の一つであった。古代から中世にかけての日本の唯識教学の展開上注視されていた学侶たちはどのようにとらえていたのであろうか。まさに「無間と解脱とは同じく一障を断じるのか」について蔵俊（一一〇四～一一八〇）を含めた貞慶（一一五五～一二一三）たちはどのように考察しているのかを論じている書が『尋思別要』での論義テーマの一つであった。『尋思別要』の論題は大きくは七十余条に分かれている[2]が、各論義テーマごとに丁数の長短・内容の浅深の別はあるものの条数そのものが『尋思鈔』（以下『尋思通要』と表記する場合もある）や『成唯識論同学鈔』（以下『同学鈔』）と比べて少数であるだけに、諸論義のテーマは何れもまず取り組まなければならない唯識教学上の課題であったということは言えるであろう。

二、唯識における菩薩修行のありよう

中国唯識学派及び日本法相宗の主要論典にあたる玄奘訳『成唯識論』には、巻一から巻二にかけて外道・小乗を破した後に、巻二からの識論（心王・心所）等と巻八からの三性及び修道（煩悩の断滅過程）が説かれている。これらは唯識教学における重要教義が網羅されていることを意味している。識論の中心は阿頼耶識（ālaya-vijñāna）であり、これに前六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識（mano-vijñāna））と末那識（manas）の七転識が加わり世界万象の現行・熏習を示す阿頼耶識縁起が説かれることになる。三性は遍計所執性（parikalpita-svabhāva）・依他起性（paratantra-svabhāva）・円成実性（pariniṣpanna-svabhāva）

の三性と相無性（lakṣaṇa-niḥsvabhāvatā）・生無性（utpatti-niḥsvabhāvatā）・勝義実性（paramārtha-niḥsvabhāvatā）の三無性を説いて唯識中道や唯識三性観へと繋がるものである。修道では、地前位を経て初地入見道の菩薩が、長い修行の過程で煩悩を断じ各位において一分一分の真如を得て不退転位へと進み、最終的に残りの煩悩を全て断じて仏果に到るという二転の妙果（大菩提・大涅槃）を得ることが説かれている。このような現在の認識活動の理解から世界を把握し、中道を理解を経て菩薩道を歩んでいく一連の教義において菩薩の修行最終位では若干の問題点があり、それが本論義のテーマになっている。

抑も唯識では菩薩の修行位は天台等の他宗と異なり四十一位を立てている。仏果へ至るための修行階梯は十住・十行・十廻向・十地・妙覚の四十一位を立て、資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位の五位に対応させている。即ち、



となり、これが三阿僧祇劫を経るというように長劫に亘って五位・四十一位を修していくことが、『成唯識論』等中国唯識以来唯識学通途の教義であった③。十住・十行・十廻向の地前位を経て、四尋思観・四如実智観の加行位の次刹那に、地上位の初地入見道より本有無漏種子を現行させてゆきまた真如を一分発得して、以降順々に第一地極喜地の住心から第十地法雲地に至る各地において有漏の種子を伏し現行を断じ最後に習気を捨して断惑してゆき、遂に証理に至る道程を歩んでいくわけである。この各地には加行道・無間道・解脱道・勝進道の四道を設けている。加行道とは煩悩を断じようとして修行を行う段階、無間道とは間隙なく煩悩を断じる段階（無間道の無間には、理を観じることと惑を断じることの二つがある）、解脱道とは煩悩を断じて理を証する段階（惑の麁重を除き体自在である点と所証の理は離繋である点の二つがある）、勝進道とはさらに禅定・智慧を磨く段階のことである。このように煩悩を断じて真理を証するのは無間道と解脱道の二道にて行なわれている。しかし、無間道で断惑し解脱道で択滅を証するのではなく、無間道では断惑するものの無堪任性（煩悩習気）を捨すために解脱道にてそれを捨しつつ択滅無為を証するという所謂「無間道断解脱道捨証」〔前六識と倶なる倶生起煩悩障の種子は金剛無間道で頓断し習気は仏果解脱道で永捨（各地で漸捨しているものの残滓を永捨。以下同様）、第七識と倶なるそれの種子は金剛無間道で頓断し習気は仏果解脱道で永捨、また前六識と倶なる倶生起所知障の種子は金剛無間道で頓断し習気は仏果解脱道で永捨、第七識と倶なるそれの現行は金剛無間道で永伏・種子は金剛無間道で頓断し習気は仏果解脱道で永捨〕とである。この断・捨・証は

無間道時已無惑種何用復起解脱道爲。斷惑證滅期心別故。爲捨彼品麁重性故。無間道時雖無惑種而未捨彼無堪任性。爲捨此故起解脱道。及證此品擇滅無爲。④（筆者傍線記す、以下同様）

無間道の時に已に惑の種無くなれり。何ぞ復、解脱道を起こすことを用ゐると爲さんや。惑を斷ずると滅を證せんとする期、心別なるが故なり。彼の品の麁重性を捨せんが爲の故に。無間道の時に惑の種無

くなると雖も而も未だ彼の無堪任性を捨せず。此れを捨せんが爲の故に解脱道を起こし、及び此の品の擇滅無爲を證せんとするなり。

とある通り、無間・解脱二道の違いが説示されている。しかし、これを基は『成唯識論述記』において『成唯識論』の文を二つに分けて

論。斷惑證滅期心別故。述曰。下論主答。由前加行期心別故。謂無間道能斷惑。解脱道能證滅。雖無間道已無惑種。證彼無爲。有此用別起解脱道。此一解也。⑤

『論』に「斷惑證滅期心別故」。述して曰はく、下は論主の答なり。前加行の期、心は別なるに由るが故に。謂はく無間道に能く惑を斷じ、解脱道に能く滅を證す。無間道に已に惑の種無しと雖も彼の無爲を證せんとして此の用有り。別に解脱道を起こすなり。此れ一解也。

と述べて、一つは無間道で断惑し解脱道で択滅無為を証する解と解釈し、今一つを

論。爲捨彼品麁重性故。述曰。下第二解。麁重性者。即二障種無堪任性。論。無間道時至擇滅無爲。述曰。無間道俱雖無惑種。而未捨彼無堪任性。爲捨此故起解脱道。解脱道起非唯爲此。及證此品擇滅無爲。卽無堪任與無間道俱滅。證無爲得與解脱道俱生故。解脱道雖不違惑得。而亦有用。此後意説。種生現雖同時。菩薩金剛心由有麁重性故不名爲佛。明此位第八識猶有漏爲麁重所依。不然如何不名爲佛。前解但爲證無爲者。金剛心中第八已無漏。未圓明故不名爲佛。後解爲勝。⑥

『論』に「爲捨彼品麁重性故」。述して曰はく、下は第二解なり。麁重性とは即ち二障の種の無堪任性なり。『論』に「無間道時至擇滅無爲」。述して曰はく、無間道と俱に惑種無しと雖も而も未だ彼の無堪任性を捨せず。此れを捨す爲の故に解脱道を起こす。解脱道が起こることは唯だ此の爲のみに非ず。及び此の品の擇滅無爲を證す。卽ち無堪任は無間道と俱に滅すとも無爲を證得するは解脱道と俱に生ずるが故に。解脱道は惑得に違せずと雖も而も亦用有り。此の後の意に説く、種が現を生ずるは同時なりと雖も菩薩の金剛心には麁重性有るに由るが故に名づけて佛と爲さず。明らかに此の位には第八識は猶ほ有漏にして麁重の所依と爲る。然らずんば如何ぞ名づけて佛と爲さざるや。前解は但だ無爲を證すが爲といふは、金剛心の中の第八は已に無漏なれども未だ圓明ならざるが故に名づけて佛と爲さず。後解を勝と爲す。

と記している。これは無間道において惑種を断ずるともまだ麁重性（無堪任性）を捨していないので、これを捨すために解脱道を起こす必要があるが、それに止まらず更に択滅無為（聖慧の簡択力によって雑染を滅して証顕された無為）を証するためとしている。このうち二解の中で後者を勝義と見ている。これは菩薩金剛心位には第八識はまだ有漏性があって麁重性の所依となっているためにまだ仏とはならない段階を指しているため麁重性を捨す必要があったわけである。しかも、麁重性には二障があり

煩惱麁重障。無始以來與所知障俱。所知障爲本。由無間道本障斷故。其未煩惱障麁重。與所知障麁重。解脱道中捨。⑦

煩惱の麁重障は無始以來所知障と俱なり。所知障を本と爲す。無間

道に本の障を斷ずるに由るが故に、其の末の煩惱障の麁重は所知障の麁重とともに解脱道の中に捨す。

と根本の障は無間道で断じ、煩悩・所知二障の麁重性は解脱道で捨すとしている。このように無間・解脱二道には異論の余地が入り込むような解釈の齟齬はないはずであったが、必ずしもそのような展開にはなっていなかった。

三、論義の展開①―『同学鈔』の解釈

このように二道の意味付けが異なるにも関わらず、無間・解脱二道では同じように断惑するのかどうかという点で、必ずしも解釈の一致を見ていない。これには等覚の位置づけにも関わってくることでもあった。日本における議論では第十地の金剛心位にある菩薩を等覚と名づけてよいのか否かを問題点とする中において、無間道・解脱道の二道で同様に断惑がなされると見てよいのかどうかが改めて問われていたのである。なぜならば『成唯識論』の通り、惑を断じることを第一義とする無間道においても理を証しないことはないはずだし、また真理を証する解脱道においても惑を捨てて択滅無為の真理が現れると見られるからである。ここに『尋思別要』での論義テーマが立てられた理由があったといってよい。この当該問題が論義テーマの一つとして掲載されている『尋思別要』以外に貞慶によって引用されている蔵俊（一一〇四～一一八〇）釈からも既に何らかの形であれ彼の『菩提院抄』（当該箇所現存せず『尋思別要』に引用）等にも取り上げられていたであろうし、更に良算（～一一九五～一二一七～）編述『同学鈔』にも同様の主題で取り上げられている。『尋思鈔』や『同学鈔』に先行する『菩提院抄』の著述年代は一部分に久安三年（一一四七）の蔵俊奥書[8]が残っているものの全体は不明である、しかし蔵俊以前にはなく平安期にも私記類等で検討された様子は現段階では見い出し難い。まさに蔵俊によって論義抄が作成されている点からこの頃が嚆矢とされると見てよいであろう。また『同学鈔』編述時期は、奥書による限り建久五年（一一九四）から建保五年（一二一七）[9]のおおよそ二十三年程の長期に亘るが、当該論義テーマ収載巻の著述年代は不詳のままである。ただ、建久五年の興玄（不詳）の奥書（巻一―八）以外の他は全て良算であり、同じく当該論義テーマ収載の巻一にも巻一―一・巻一―二は良算の奥書がある。巻一―七が興玄作なのか良算作なのかは奥書からは判断できないものの同巻他論義テーマを加えてみると巻一―七は良算作と捉えておきたい。たとえこの箇所が後々興玄作であったと判明しても本稿では『同学鈔』の当該内容を把握するという視点のみなので作者問題には発展しないことを敢えて記しておきたい。なお興玄は建久五年以後には名が現れず、全て良算の名のみからもこの頃に死去等編纂から離れていると見てよいであろう。

ところで、良算は同法二～三名の一名として貞慶の『尋思別要』・『尋思鈔』（『尋思通要』）作成に大いに関わっていて、貞慶が『尋思鈔』編述を企図した建久八年（一一九七）以降、建久九年（一一九八）から正治二年（一二〇〇）にかけての『尋思鈔』作成直前の時期[10]に、恰も『尋思鈔』の草稿的書と見なして差し支えないであろう『摩尼抄』（散逸）を貞慶の指示で作成している。『尋思鈔』はその直後の正治二年から建仁元年（一二〇一）にかけて『尋思別要』・『尋思通要』の順で作成されており、後述する当該論義テーマの内容から当該箇所は貞慶に師事する時期か或いはそれ以前から着手している可能性があると見られる。

その『同学鈔』の発問には

問。西明意。釋等覺名。無間解脫同斷一障云云。爾者淄洲大師。可許此義耶。⑪

問ふ。西明の意は等覺の名を釋し無間と解脫とは同じく一障を斷ずと云云。爾らば、淄洲大師は此の義を許す可き耶。

と述べて始めており、円測は等覚位を無間解脱同断一障であると解釈しているとして、これに対して慧沼は認めているのかという問題設定である。これには先述の通り、無間解脱に関する解釈について円測が採った解釈を慧沼が必ずしも否定していないと見る向きがあり、これについて理の適った解釈を提示することを目指していたわけである。『同学鈔』では上述文に続けて慧沼が認めない場合を提示して、『成唯識論了義灯』（以下『了義灯』）を見る限りでは円測を批難しているようには見えず、助解を設けて円測釈を本とし慧沼釈を別義としていると見なしている。そこで円測には三釈があってこれは玄奘の解でもあったので認められないわけがないという問難である。ところが智周の『成唯識論演秘』（以下『演秘』）にはこの釈を批判している。ただ智周がやみくもに法系上先徳にあたる慧沼自身を否定するはずがなく、『了義灯』の他の箇所を見るとやはり断惑証滅に相違するとして慧沼もこの釈を破斥しているとするのである。このように慧沼に両義あるように捉えられるが本当はどうなのであろうと再度問いを設定している。ここではあくまでも慧沼による許不許に焦点を当てていることが分かる。

『同学鈔』ではこれに対して、このような釈に難とするところはないけれども『演秘』に基づけば認めないという解釈（慧沼不許と捉える）を取っている。つまり

答。誠如疑難。雖引此釋別無難破。雖然准演祕意。不許此義歟。演祕所引三箇異說。卽西明疏三解。其義無替。誰依用セン耶。隨下燈中委難之畢。三藏解說。西明所傳。如云要集雖云三藏所說。然恐傳錯也。別引此釋者。見西明疏。初二義ニハ同安有義（義＝云〈甲〉〈乙〉）之言。至（（今）＋第〈甲〉〈乙〉）第三義。今三藏云等云云。此卽彼師實義見。故燈師且引此義許也。但至今有（有＝又〈甲〉〈乙〉）助釋（釋＋（之）〈甲〉）文者。圓測義外。更作別釋。故云肋釋。以彼師義。非爲本義。演祕破有人三義了。今助一釋等云云。以彼可准之。⑫

答ふ。誠に疑難の如し。此の釋を引くと雖も別に難破無し。然りと雖も『演祕』の意に准ずれば此の疑を許さざる歟。『演祕』所引の三箇の異說は卽ち『西明疏』の三解なり。其の義替ること無し。誰か依用せん耶。下の『燈』に隨ひ中に委しく之れを難じ畢ぬ。三藏解とは西明の所傳なり。『要集』に三藏所說と云ふと雖も然して恐らく傳の錯りと云ふが如き也。別に此の釋を引くとは『西明疏』を見るに初二義には同じく有義の言を安く。第三義に至りては今三藏の云く等と云云。此れ卽ち彼の師の實義と見たり。故に燈師且く此の義を引いて許す也。但し今助釋有りの文に至るとは、圓測の義、外に更に別釋を作す。故に助釋と云ふ。彼の師の義を以て本義を爲すに非ず。『演祕』に有人の三義を破し了んぬ。今一釋を助けて等と云云。彼を以て之れに准ず可し。

と。このように『演秘』によれば、この箇所は三義あったとして第一・第二義は有人釈、第三義は玄奘釈と見なすのはただ円測の所伝に過ぎず『了義灯』でも「今有助釋」と捉えているので、『演秘』はこれはあくまでも別釈であって本義ではないと見て第三義と有人の二義を含め三義

全体を退けていると見なしているのである。智周の見解によれば、『西明疏』では「三藏云等」を玄奘の実義と見なしていると慧沼は捉えてしばらく認めると見るものの、「今有助釋」と記している点は既に円測の別釈であるため決して本義とは認められず、否定している。即ち『同学鈔』では、『演秘』をもってして円測義とされる釈を排していたと捉えて、三義全体を否定していることになろう。ただし、ここでは等覚の問題は直接に述べられておらず、慧沼の許不許と智周はどのように捉えているかに論点を絞って論義を展開していることが理解できる。

ただし、抑も『同学鈔』の発問にあった等覚の件、換言すれば「玄奘三蔵は、等覚菩薩は無間道と解脱道とにおいて同じく一障を断じている点より等覚というと解釈しているから、決して如来の悟りと等しいので等覚というのではない」[13]と円測が捉えていたとされる解釈について、慧沼の見解と智周の見解とは必ずしも一致していたわけではなく、円測の見解に対する捉え方は異なっているため、『尋思別要』でもこの問題をテーマの一つとして、『尋思鈔』よりも先に作成された『尋思別要』七十余条の中に収められていたわけである。なお『同学鈔』における議論の推移を見ると、後述する『尋思別要』と比べて視点を異にした展開を図っている。議論の深まりという点では『尋思別要』に譲っていると見てもよいのかも知れない。

四、論義テーマの展開②―貞慶の思索

論義の研鑽のためには前もって経論の本文の抜き書きを用意することが正しい論理展開を可能とする一つの方法であった。個別の論義テーマだけの書籍（短釈）であれ『成唯識論』巻一から順に巻十までの論義テーマを集成した書籍（論義の書）であれ、恐らく個々に経論本文の資料集が作成されてきたであろう。既に短釈類に「蔵俊文集」や「良遍文集」の名が見えることが言及[14]されており、前節の『同学鈔』にも何らかの資料集が存在したことは容易に想像がつくものの現時点では残されていないと見てよいであろう。今日、経論本文が集められて現存し且つ刊行されている書は『唯識論本文抄』（以下『本文抄』）のみである。近年、『本文抄』は貞慶が『尋思鈔』を作成する段階で予め良算によって作成された可能性が高いことが指摘されている[15]。しかも『本文抄』の論題が『尋思鈔』のそれと類似している点[16]や個々の論義で引用されている経論が該当する『本文抄』論義の経論と重複している点が多いこと等からも可能性は否定できないと言えるのであろう。

貞慶が『尋思別要』でこの論義テーマを取り上げていたのには、上述の点から「無間解脱同断一障」と「等覚」についての見解を整えておく必要があったと言える。即ち慧沼や智周の解釈をもとに円測を正しながら慧沼・智周両者の教義には矛盾なく整合性を取るように正していこうとする会通的な論理展開が示されていたわけである。これは慧沼の『了義灯』と智周の『演秘』とでは円測の見解に対する捉え方が異なるため、法相学侶の彼らにとっては「無間解脱同断一障」と「等覚」についての見解は無謬性を持って整理して残していく必要があったと言えよう。そこで、『尋思別要』では第十地の満心における金剛心菩薩を等覚と見なすのか否かという点について、『了義灯』には二釈（無間道と解脱道において同じく一障を断ずるという解釈と西明相伝の等覚の解釈）があると答えることから問答を始めている。なお『本文抄』には『了義灯』と『演秘』の該当箇所のみを挙げ他書の参照はない。[17]

さて、まず『尋思別要』では、次のように発問している。

問。以二金剛心菩薩一名等覚之義燈師如何釈給乎。[18]

問ふ。金剛心の菩薩を以て等覚と名づくの義、燈師は如何に釈し給ふ乎。⑲

と、金剛心菩薩は等覚と名付けられるのか否か、慧沼はどのように解釈しているのかと等覚名を前面に出して無間・解脱同断一障について論じることになる。続けて『了義灯』には二釈存在するとして

燈有二二釈一。一云。无間解脱同断二一障一故。一云。等覚。＊西明〉相傳三藏釈也。〈燈引不難レ之＊。今云。約所證理後更無障障所証理。故見ヨト分明ナリ。不同此前猶有＊助釈也＊付之同断一障之義演秘所引有義一釈也。秘師破レ之云。若對二断障同一対名為レ等。理即有異。而未レ見レ文。＊文或本云〈理即有歟＊。後義不レ明。金剛心ニハ有二麁重一見レ理ヲ不分明一。仏果捨レ之見レ理分明也。何ッ約證レニ理不レ等仏果一耶。若強有等義一者如何断障為設二證果故ト耶。⑳

『燈』に二釈有り。一つに云はく无間・解脱とに同じく一障を断ずるが故に。一つに云はく等覚なり。＊西明相傳、三藏の釈也。『燈』に引くに之れを難ぜず＊今云はく、所證の理に約し、後に更に障として所證の理を障ふること無し。故に見ること分明なり。此より前の猶し有りて同じならず。＊助釈也＊之れに付きて同断一障の義は『演秘』所引の有義の一釈也。秘師は之れを破して云はく、「若し断障同じに対して名づけて「等」と為す。理に即ち異なり有り。而るに未だ文を見ず」と＊文（ふみ）り。或る本に云はく「理即有」歟＊後義は明からならず。金剛心には麁重有り。理を見るに分明ならず。仏果に之れを捨つこと理を見るに分明也。何ぞ理を証すに約して仏果を待たざる耶。若し強ひて等の義有れば如何に断障して二の證果を設くるが故にと為す耶。㉑

とある。『了義灯』釈を「一つに云はく无間・解脱とに同じく一障を断ずるが故に」と「一つに云はく等覚なり」の二釈としており、智周に軸足を置いて論じる『同学鈔』には述べられていなかった捉え方である。ここにも議論の深まりがあったのかも知れない。ただ、この『了義灯』を二釈と見なしている点が原文とは少々異なっていて、『了義灯』原文では

西明云。三藏解。等覺者。無間解脱同斷一障。故言等覺。非謂解齊名之爲等。㉒

西明の云はく、三藏の解す等覺とは無間と解脱に同じく一障を斷ず。故に等覺と言ふ。解と齊しき之れを名づけて「等」と爲すと謂ふに非ず。

とある。確かに原文の直接引用ではなく取意文であるので原文と異なっているのは当然とする見方もあるかも知れないが、同内容の域を超えて『尋思別要』では二釈という意味の取り方をして議論を進めている点に新たな知見を得ていると言えよう。ここには智周の見解を受けて新たに議論を提示しているという特徴がある。

ところで今の『了義灯』では、まず原文は慧沼は円測の見解を載せて、円測の主張とは玄奘の説くところとは等覚は無間道と解脱道において同じように一障を断じるのであるとしており、等覚とは仏と斉しいので「等」とするのではないと説いているとし、円測自らが述べるのではなく、円測相伝の玄奘の見解であったとしている。しかし、慧沼はこの見解に聊か意見があったようで別の見方も存在していて

今又助解。約所證理後更無障障所證理。故見分明。不同此前猶有微障見不了了不云等覺。此云等覺但約根本。非據後得。今此菩提意說。後得一切種智不同前故。名爲勝果。[23]

今、又助解す。所證の理に約す。後、更に障として所證の理を障ること無し。故に見ること分明なり。此より前の猶ほ微障有りて見ること了了ならざるをもって等覺と云はざるには同じからず。此に等覺と云ふは、但根本に約す。後得に據るには非ず。今、此の菩提といふは意の說かく、後得の一切種智は前に同じからざるが故に。名づけて勝果と爲すと。

と述べている。これは所証の理からすれば仏も金剛心菩薩も同じである点から等覚と言えると釈すわけで、決してこの段階（等覚）から以前の位（十地）にはなお微かな障（無明住地）が残っているからと言って等覚と言えない点と同じではないと見ている。この点で、もし同じ等覚であれば勝果が得られないという疑いには等覚は根本智について述べているために問題はないと見ている。円測相伝の玄奘釈に対して真正面から否定はせず、「助解」という形で論じている。ここが後々「不難」とされている箇所である。即ち『了義灯』の一連の見解について、『尋思別要』は上述取意文の後に上記の『了義灯』を引用し、「西明相傳、三藏の尺也」と「『燈』に引くに之れを難ぜず。助尺也」という割註を入れている。この『了義灯』の見解に対して、異なる見解が『演秘』に見られるのである。抑も『演秘』では、『成唯識論』の「得二勝果」[24]について『了義灯』の通りであるとした上で、「今助一釈」の仏所得の法を得る菩薩以外、有義三伝を退けているている。即ち、

一云。一刹那間正體後得與佛平等名爲等覺。依長時言對彼名勝。二云眞智平等。後智劣佛。三云眞俗二智俱未究竟不名平等。無間解脱同斷一障。故說等言。習氣未盡。雜染未捨。鏡智未生。事智未起。未遍緣俗。知眞未圓。故實非等。詳曰。雖有三解疑猶未遣。……由斯三釋皆未敢依。未見所據。而無所據。[25]

一に云はく、一刹那の間に正體と後得が佛と平等なるを名づけて等覺と爲す。長時に依りて言へば彼に對して勝と名づく。二に云はく、眞智平等なり。後智は佛より劣れり。三に云はく、眞俗二智俱に未だ究竟せざれば平等と名づけず。無間と解脱に同じく一障を斷ずるが故に等の言を說く。習氣未だ盡さず。雜染未だ捨てず。鏡智未だ生ぜず。事智未だ起らず。未だ遍く俗を緣ぜず。眞を知ること未だ圓かならず。故に實には等に非ず。詳に曰はく、三解有りと雖も疑ひ猶ほ未だ遣らず。……若し障を斷ずるに對して同じく名づけて等と爲せば、理即ち失有り。斯れに由りて三釋皆未だ敢へて依らず。未だ所據を見ず。而も所據無し。

とあるように一刹那に根本智と後得智が仏と平等であるとする第一釈、真智平等であるとする第二釈、無間道にも解脱道にも同じく一障を断じるとする第三釈を提示し、三釈何れもが所拠は見られず、所拠はないと断言して排している。この第三釈が『了義灯』掲載の円測が玄奘の解としていた釈で、慧沼は明確に否定する言辞はなかったものの『演秘』では右記のとおり一障を断じる点から等覚とすることは否定している。明確に否定する言辞がないことが後世「此即彼師實義見。故燈師且引此義許也」[26]や「西明相傳三藏尺也。燈引不難之」[27]という認識になっていったわけである。つまりこの解釈の差について「理即有失」[28]と述べるだけであって直接理由への言及がないだけに議論の余地もあったようである。しかも三釈共通では「未見所據而無所據」[29]と抑もの教証の存在を

肯定していない。

このような『演秘』の解釈を受け止めながら上述の『尋思別要』では『演秘』第三釈が『了義灯』での円測相伝釈に当たると指摘し、さらに金剛心にはまだ麁重煩悩があって仏果に捨てることは明らかであるため、理を証す点では仏果に至ることが当然勝っているわけであるからもし強いて「等」の義があればどのように断障して直ちに二証果を設けるのかと疑問を投げかけている。

『尋思別要』では先述の通り『了義灯』では二釈という捉え方をしていなかったものを二釈と捉え直している。換言すれば『演秘』では三釈中の第三釈が円測相伝であったものを一釈とし、それに『了義灯』の円測相伝の前文を一釈と捉え、都合『了義灯』の前後文を二釈としているという見方が可能となってくる。『尋思別要』は上述文に答える形で蔵俊・貞慶の見解を示している。まず蔵俊の見解を提示して、

本云。初釈意ハ无間ニハ正断ス解脱已断ナリ。俱ニ有二断ノ義一故云二同断一障一ト也。金剛心断二仏果障一畢仏果已ニ断ス故ニ立二断ノ名一ヲ也。故論九云。金剛喩定現在前スル時彼皆頓断入二如来地一。由レ此仏地説レ断二二愚一ニ之云云。既云金剛心所断即説二如来地所断一。无間解脱同断一障之義尤明也。此約二根本智一ニ明二等覚ノ義ヲ則於レ菩薩ニ立二等覚ノ名一ヲ也。演秘所破有人通二本後二智一ニ明同断以後。然談功能可爾故云理即有異也。聖教无下一刹那中通二後得一ニ之文上故云二而未見文一ト也。与二燈釈一既異也。不レ可二混濫一也。[20]

本に云はく、初釈の意は无間に正断し、解脱に已断するなり、俱に断の義有るが故に同断一障と云ふ也。金剛心は仏果障を断じ畢り、仏果に已に断ずるが故に、断の名を立つ也。故に『論』第九に云はく、「金剛喩定の現在前する時、彼れをば皆な頓断して如来地に入る。此れに由り仏地に二愚を断ずと説くなり」と云云。既に金剛心の所断は即ち如来地の所断と説くと云ふ。无間・解脱には同断一障の義、尤も分明也。此れ根本智に約して等覚の義を明かすに、則ち菩薩に於いて等覚の名を立つ也。『演秘』に所破の有人は本後二智に通ずと、同断以後を明かす。然らば功能を談ずること爾る可きが故に「理即有異」と云ふ也。聖教には一刹那の中、後得に通ずの文无きが故に「未見文」と云ふ也。『燈』釈と既に異なる也。混濫す可からざる也。[21]

と、本云（蔵俊）[22]は初釈「一云無間解脱同断一障」については『成唯識論』巻九[23]をよりどころとして「無間道で正断し解脱道で已断する」と見て、俱に「断」の義があるため「同断一障」と言えるが、金剛心位においてすでに仏果障を断じ畢っているといい、「すでに断じ畢っている」という観点より仏果においては「断」というのであるとしている。これをもって、金剛心位以前にはなお一障があるものの、金剛心位以後には理を障えるものはないので、「断障」という観点では無間と解脱とは同じであるとして、この点よりすれば金剛心位は等覚と称せられるのであると論じている。これは根本智から見て等覚の意味で把握するので菩薩に対してその名を冠することができると見ている。一方の後釈「一云等覚」については、

後釈定所證理中道金剛心已前ニハ有二一障一愚見不二分明一。金剛心以後ニハ念无二障現起シテ障二コトト所説理一。无レ障見レ理无間解脱同故ニ云二等覚一也。今付二一障一愚ニ明无レ義不レ義一。麁重亦无一。秘中破二有人一云。真智平等不辨ハ此旨汎爾ニ云二平等一ニ故破レ之也。今料簡〇燈文云西明云乃至不云等覚者以二二義一明二等覚名一ヲ也。此云等覚一

乃至名為二勝果一者等覚ト与二勝果一相対シテ會二相違一也。依レ之可知。但約二根本一之釈及二初釈一也。仍異有義耳。[39]

後釈の定めて所證の理をば中道にして金剛心已前には一障有りといふは、愚見にして分明ならず。金剛心以後には念に障りの現起して所説の理を障ふること无し。障无く理を見ること、无間・解脱と同じなるが故に等覺と云ふ也。今、一障に付きて愚かに明かすこと、義无く義ならず。麁重无し。『秘』の中に有人を破して云はく、「真智平等を辨ぜざれば、此の旨も汎爾に平等と云ふが故に」とて、之れを破す也。今の料簡は（中略）『燈』文に云はく、「西明の云はく乃至等覚と云はず」とは、二義を以て等覚の名を明かす也。「此に等覚と云ふは乃至名づけて勝果と為す」といふは等覚と勝果と相い對して相違を會す也。之れに依りて知る可し。但根本に約すの釈、初釈に及ぶ也といふことを。仍りて有る義とは異なる耳。[40]

とある。所証の理から見て金剛心位以前には一障があるものの、金剛心位以後には障はなく理に至ることを説いて、無間・解脱は同じであるので等覚としている。何れにしろ『了義灯』文は上記二義（二釈）をもって等覚であると明確にしていると捉えているわけである。決して詳細に説いているとは言い難いものの『了義灯』文を二釈と捉え直し、倶に等覚の意を示すと理解していることは分かるものである。ただ『演秘』が三釈を示して『了義灯』の円測相伝を第三釈に当たるとして排しているとする点については、ここではその妥当性の有無には深く論じている点は引用文からは窺い難い。

貞慶は先に蔵俊の見解を引いているが、これを否定しようとしているわけではない。ここでは蔵俊の見解を一解釈として貞慶自らの見解を提示する形を取っている。即ち、

末云。於二同断一障義一可有二二門一若寄セテ一障断義強論二同義一ヲ者■■■■■故者非无勝劣ニ而燈ハ依ニ一邊一許■■■若不レ如レ此者等覚ノ義難成。於三実有二勝劣一非説二等義一ヲ故演秘又依二実義一ニ明勝劣。有義作此人謂盡理故為レ遮二末学迷惑義一論レ之。全不可寄之。[41]

末に云わく、同断一障義に於いて二門有る可し。若し一障断義に寄せて強ひて同義を論ずるは■■■■■故にといはば、勝劣无きに非ず。而して『燈』は一邊に依りて許す。■■■若し此くの如きにあらざれば、等覚の義は成じ難し。実の勝劣有るに於いて等の義を説くに非ず。故に『演秘』に又た実義に依り勝劣を明かすといふは、有る義に此の人は理を盡くすと謂ふと作すが故に、末学迷惑の義を遮せんが為に之れを論ず。全く之れに寄る可からず。[42]

と、若干の欠落箇所はあるものの意味は通じている。ここで貞慶（末云）は、「（無間解脱）同断一障義」には二門あると捉えている。無間と解脱の断障の義には勝劣があるものの、『了義灯』はこれを「同等」（一辺）とする観点より「等覚」とすると見なし、決して実際の勝劣から「等覚」を説いているわけではなかった。一方、『演秘』では金剛心位（無間道）と仏果（解脱道）の断障に勝劣があるという実際の勝劣の点を重視して「等覚」とはいえないとしたと言うように分析し、『了義灯』と『演秘』の解釈の違いを指摘したのである。つまり、『演秘』では金剛心位とは「習気は未だ尽きていない。雑染も未だ捨していない。大円鏡智も未だ生じてはいない。成所作智も未だ起きていない。未だ俗を遍く縁じてはいない。真理を知ることも未だ円かではない」[43]と述べてすべてを成就した如来とは根本的に異なることを指摘している。これ

をもって「何を以て等覚と名づけるのか。断障が同じなので等覚というのは理にも文にもないことである」[29]と批判していたわけである。したがって『演秘』では三釈を否定して、金剛心位を等覚位であるとは認めていないことが知られるのである。貞慶にとって『尋思別要』・『尋思通要』（『尋思鈔』）の手本[30]となる先学の蔵俊の見解を提示して、少々異なった解釈の存在を示しつつもそれは否定していない。慧沼に焦点を当てるその視点の差を認識しながら自己は別の観点から新たに提示していたと言える。即ち、『了義灯』所説の一釈から見れば「等」と言えるものの『演秘』に説くように実義の点からは勝劣があり「等」とは言えず、これは「末学迷惑の義を遮す」ためと明言している。蔵俊の解釈を提示しその後で自らの解釈を示すことで、複数の見解の存在することを記していて決択しようとしていたようではないが、自らの解釈の有用性は述べられている。

あくまでも「同断一障」のみをもって等覚を規定するものではなく、ただ諸宗の五十二位説等に示される等覚位の存在を否定し、唯識教学における「等覚」の意味を確認して法相宗の四十一位説を護持したとも言えよう。何れにしても異なる観点から論義テーマが把握されることと唯識教学での「等覚」の意を探り合わせて四十一位説の護持という複数の点から本論義テーマを立てて収録している意義が存在していたと言えるのではないであろうか。

五、むすび

唯識教学における仏果へ至る修行階梯では、三阿僧祇劫・四十一位を経て菩提と涅槃の二転依の妙果を得ることが説かれてきた。この中国唯識以来の教学について、中国で問題となりそれを承ける形での問題・中国では問題にならなかったものの日本で新たに疑問視する中国由来の問題・日本において新たに設定された問題と言うように論義テーマにはさまざまな形がある。ただ何れも厳密な区別は難しく、どの論義テーマも源は『述記』や三箇疏等に辿り着くが、議論の跡からは便宜上三つほどに区分けすることはできよう。一つめは分かりやすいが、二つめと三つめは重なり合いなお区別し難いのも確かである。敢えて言えば、三つめが日本唯識で独自に問題を抽出し出した論義テーマであるのに対して本稿で取り上げた「無間解脱同断一障」は、二つめの中国で俎上に挙がらなかったものの日本で新たに問題設定されたテーマの一つである。このように言えることで論義テーマ整理は可能となる。何れにしても日本法相宗にとって『了義灯』と『演秘』は重要論典であるだけに、その無矛盾性の確保は依って立つ唯識教学の基盤の是非に関わるものであったと言えるであろう。

抑もは基と同時代に活躍した同門の円測による「玄奘の解」（西明相伝）が問題の発端となっている。円測の『成唯識論』註釈書は散逸し当該逸文も伝わっていないため、基の在世中に何らかの反応を示したのか否かも定かではない。少なくとも基の『述記』等の段階では何らかの問題が提起されるような素地は見受け難いものであったし、玄奘の解とする円測の釈にも言及していなかった。しかし、慧沼の『了義灯』の段階では円測の相伝（西明相伝）として記し、この箇所では明確に円測相伝を排しているわけではなかった。この点が『演秘』の見解を踏まえてではあるが、日本では議論の対象の一つとなっている。ところが決定的には変化したのは、智周の『演秘』の段階になると『成唯識論』の「二勝果を得る」という箇所で、等覚や二乗の解脱を何故「勝」と言えるのかと言う問を設けて、広くは『了義灯』の通りだとしながらも新たに有義の相伝三釈を提示してすべてを否定していることからである。その相伝第三釈を『了義灯』における円測相伝に該当することを示している

ため、この点をどのように理解すべきなのかが問われることになったわけである。ただし智周以降に唯識を学ぶ僧たちによる議論は、別の点に関心が向けられているため直接的な言及は見られない。それためこの論義テーマは中国で俎上に挙げられたものではなく、日本において『了義灯』と『演秘』とでは一見相違を来しているように見えるだけに新たにテーマ設定されたものである。『尋思別要』には蔵俊の見解を引かれていること、さらに管見ながら蔵俊以前の平安中期真興『唯識義私記』等現存唯識書及び逸文等には登場していないことからして、少なくとも平安後期「論義の書」成立時期頃には既にテーマ設定または疑問点が存在したことは言えるであろう。その後、『同学鈔』において「無間解脱同断一障」の論題の下、慧沼による円測相伝の認知有無が論義テーマとして取り上げられ、今また『尋思別要』において同題の下で『同学鈔』とは異なった観点から記されていたわけである。まず『了義灯』の文を「一云無間解脱同断一障」・「一云等覚」の二釈と捉え―『了義灯』では決して二釈としていない―、そのうち後釈にあたる円測相伝について慧沼は否定していないが、智周は『演秘』において明確に否定しているとした上で、蔵俊の見解を記しその後で貞慶自らの見解を述べる形を取っている。蔵俊の引用逸文は『了義灯』のその二釈を倶に等覚の意味する点を明らかにしていると釈している。

一方、貞慶は、詳細は残されていないものの「同断一障」に二門を認めている。『了義灯』では「同等」（一辺）とする観点より「等覚」とすると見なし、実義の点から勝劣から「等覚」を説いているわけではなかった。『演秘』では金剛心位（無間道）と仏果（解脱道）の断障に勝劣があるという実義の点から勝劣を重視して「等覚」とはいえないとしたと言うように分析して、『了義灯』と『演秘』の解釈の違いを指摘している。『演秘』の三相伝否定の面からすれば、「同断一障」からは等覚の意味を探るべきではないと捉えていることになる。蔵俊の解釈を記した後で、それを否定せず貞慶自らの解釈を示すことで複数の見解の存在を示唆しながら、自らの解釈の有用性を説いていることを意味するであろう。ここには異なる観点から論義テーマが把握されることと唯識教学での「等覚」の意を探り、合わせて四十一位説の護持という複数の点から本論義テーマが『唯識尋思鈔』に収録されているところのその意義を見ることができるものである[19]。

註記

①根無一力「慧沼の研究―伝記・著作をめぐる問題」（『佛教學研究』四三、一九八七年六月）の生没年代に準じる。

②条数への初言及は新倉和文「貞慶著『尋思鈔』と『尋思鈔別要』の成立をめぐって」（『佛教學研究』三七、一九八一年三月）、その後『尋思別要』と『尋思通要』『本文抄』との関係性では西山良慶「『唯識論尋思鈔』の構成」の「二『尋思通要』と『成唯識論本文抄』」（楠淳證・後藤康夫編著『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』二五七～二六二、法蔵館、二〇二二年二月）参照。

③断惑証理のありようは『成唯識論』巻九～巻十（大正三一・四八中～五九上）に説かれている。

④『成唯識論』巻九（大正三一・五二中～下）［原本高麗本大蔵経、対校本は八本存在するが当該箇所は該当しない］。原文引用及び訓読文はフォント上なるべく正字を用いることとする。以下同様である。但し『尋思別要』については基本的に書籍通りに記すものの、本稿では訓読文は日本漢文史に準じて現時点では歴史的仮名遣いに変更し、漢字は原文通りとした。

⑤『成唯識論述記』巻十本（大正四三・五八四下）［原本春日版東大寺蔵本、対校本は六本存在するが当該箇所は該当しない、以下同様］。

⑥『成唯識論述記』巻十本（大正四三・五八四下）。
⑦『成唯識論述記』巻十本（大正四三・五八五上）。
⑧『唯識論第六巻菩提院鈔』第一（仏全七七・一二〇上）、『同』第二（同・一五〇上）、『同』第三（同・一七九上）、『同』第四（同・一九六下）。
⑨『成唯識論同学鈔』巻一―八（仏全七六・二一四下）・巻三―七（大正六六・二五五下）。なお、この巻三―七の「建保五年五月」の該当箇所は仏全（巻三―五に相当）には記載されていない。大正蔵経［原本元亨四年写薬師寺蔵本、甲本薬師寺蔵古写本、乙本大日本仏教全書本］は「（此奥書甲本乙本倶無之、乙本奥書曰奉寄進興福寺、同學鈔古鈔本全部四十八册、于時明治二十三年六月中旬還佛會記念第三回當日法隆寺管主大僧正千早定朝、一本奥書曰寫本云永祿五年壬戌六月十一日終筆當國爲體筒井順政越智伊與守十市新次郎以下又牢人進般宇多郡へ手遣澤之城以上三山田城高之堺城以下落居鷹取芳野城不落昨日松永彈正歸陣多聞山三逗留ト云云執筆春信房得業）寫本云建保五年丁巳五月七日草畢。當卷端三段往日記之相例門以下無諸仍抄繼耳。沙門良算。論第三卷同學鈔第七（七＝五〈乙〉）終」とある。
⑩楠淳證「『唯識論尋思鈔』の編述」の「二 聖覚房良算と『摩尼抄』」（『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』」一八八～一九七）参照。
⑪『成唯識論同学鈔』巻一―七（大正六六・六八上）。［原本元亨四年写薬師寺蔵本、甲本薬師寺蔵古写本、乙本大日本仏教全書本］
⑫『成唯識論同学鈔』巻一―七（大正六六・六八中）。原文のうち甲乙対校本は「誰依用セン耶（耶＋〈又有答云不許有人之義尤得其道理凡以金剛心眞智望佛果智之時障猶未盡復未圓證明昧既異何云眞智實平等障猶未盡復未圓證以何名等難卽此意也但於溜洲大師釋者凡彼釋意金剛心已前皆有一障二愚見理不分明金剛心以後全無障現起障所證理無障見理無間解脫同故云□□也此卽付一障二愚明無障之義麁重不云亦無也而有人義不致今分別故撲揚大師破不許之也故溜洲撲揚邊邊義存成自義難他師也）百七十四字〈甲〉、耶＝哉〈乙〉）」とある。なお、対校本（甲本薬師寺蔵古写本・乙本大日本仏教全書本）は文脈上ここでは採らない。
⑬『成唯識論了義灯』巻一末（大正四三・六七三中）［原本寛文七年版本、対校本は三本存在するが当該箇所は該当しない、以下同様］。円測の該当箇所のある書籍は現存せず、慧沼の同書において円測等は批判されており、『演秘』でも『了義灯』を引用する形で論を進めている。なお円測の『成唯識論疏』は散逸しており当該逸文も見つかっていない。
⑭楠淳證「『唯識論尋思鈔』の編述」の「三 『本文抄』の作成」（『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一九七～二〇二）参照。更に追加すると、大谷大学図書館所蔵『南都論草』の「色法等無間縁」という論義テーマにも「寛文七年 丁／未 八月十六日写之」の文集が、宮尊・一問荅・好胤・好胤・有算・有算・無名の七短釈と共に存在している。
⑮註⑭の楠氏の論稿参照。
⑯註②の西山氏の論稿参照。
⑰『本文抄』巻一―四［原本薬師寺蔵写本、甲本正応四年写深草善福寺蔵本、乙本東大寺蔵本］には「**問**。契經中以金剛心菩薩名等覺云云爾者燈師何釋之乎。**問**。樸楊大師如何釋耶 燈云。西明云。三藏解。等覺者。無間解脫同斷一障。故言等覺。非謂解齊名之爲等。今又助解。約所證理。後更無障障所證理。故見分明。不同此前猶有微障見不了了不云等覺。此云等覺。但約根本。非據後得。今此菩提。（意＝有〈甲〉）意説。後得一切種智不同前故。名爲勝果云云。祕云。廣如義燈。有義解等覺妨。相傳三釋。一云一刹那間正體後得與佛平等。名爲等覺。依長時言對彼名勝。二云。眞智平等。後智劣佛。三云。眞俗二智倶未究竟。不名平等。無間解脫同斷一障故説等言〇詳曰。雖有三解。疑猶未遣。且金剛位是無間道。何有長時對之云勝。設云此位有多刹那佛平等者。是何刹那。彼倶無間。未可於中分成勝劣。若勝形前前非等覺。何過須釋。若形二智名勝等者。障猶未盡。復未圓證。以何名等。若對斷障同名爲等。理卽有矣。而文未（見＝覺〈甲〉）見。由斯三釋皆未敢依。未見所據。而無所據。今助一釋。佛所得法而皆得之菩薩稱等。所得自在離障圓極。故佛云勝。故大般若五十五云。云何當知已圓滿。第（十＋（地）〈甲〉）十法雲地菩薩。與諸如來應言無異。善現。是菩薩已圓滿六波羅蜜多・八（定＝道〈甲〉）定・三十七道・三三昧・五眼・六通・佛十力・四無畏・無礙・無量・十八不共・一切智・道相

智・一切相智・一切佛法故。若復永斷一切煩惱習氣相續。便住佛地。是故當知與諸如來應言無異。釋曰。現正等覺是一切智。極善通達是道相智。現等別覺是一切相智〇准于此文。無異之言等之別名。障未離等顯佛爲勝。據（斯＝此〈甲〉）斯所憑於理通矣。問。勝劣差等義焉在。答。約所得德名數無（差＝異〈甲〉）差。等言德數。不據用齊一同圓極方名等也。故智度論云。如月十四日十五日雖同是月。小不合海潮。得潮有異。而佛菩薩亦復如是。又如向果勝劣性差聖名同也。如言燒衣。一分亦轉。據斯相形。等勝無咎文」（大正六五・四三七下～四三八中）（ゴシック・囲み・横線筆者記す）とある。

⑱『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』」一一五三。なお原文中の「＊」は割注箇所の範囲をさす。同書の凡例参照。

⑲『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五五。註④に記した通り同書訓読文は現代的観点から読みやすさに考慮して現代仮名遣いにしている。本稿では日本漢文史に照らして現時点では歴史的仮名遣いに変更し、訓読文での漢字も原文通りとした。なお返り点は原文通りとしているが、訓読する際は必ずしもそれに従わない場合がある。引用文に訂正がある場合はすべて訂正字句とする。以下同様。

⑳『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五三。

㉑『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五五～一一五六。

㉒『成唯識論了義灯』巻一末（大正四三・六七三中）。

㉓『成唯識論了義灯』巻一末（大正四三・六七三中）。

㉔『成唯識』巻一（大正三一・一上）。

㉕『成唯識論演秘』巻一本（大正四三・八一七中）。［原本寛文十一年版本、甲本東大寺蔵古版本、乙本薬師寺蔵古版本、丙本大谷大学蔵古版本］対校本甲本は「理即有失」の「失」は「失＝矣」とあるが文脈上採らない。

㉖『成唯識論同学鈔』巻一―七（大正六六・六八中）。

㉗『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五三。

㉘『成唯識論演秘』巻一本（大正四三・八一七中）。

㉙『成唯識論演秘』巻一本（大正四三・八一七中）。

㉚『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五三～一一五四。

㉛『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五六。

㉜「本云」を蔵俊、後述の「末云」を貞慶と措定することについては、既に註②の新倉論稿において早期の段階で言及している。

㉝『成唯識論』巻九「金剛喩定現在前時彼皆頓斷入如來地。由斯佛地說斷二愚及彼麁重」（大正三一・五三・下）。この金剛喩定は、菩薩の修行階梯の中の第十地満心に仏果を障礙する最後まで残った微細な惑障を頓断して、次に究竟位に至るための禅定を指す。『尋思別要』では金剛無間道の段階にあり等覚の位にあたる。

㉞『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五四。

㉟『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五六。

㊱『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五四。

㊲『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一一五六。

㊳『成唯識論演秘』巻一本（大正四三・八一七中）。

㊴『成唯識論演秘』巻一本（大正四三・八一七中）。

㊵「其以就故上綱反旧抄等取略拾/其れ以て故上綱の変旧抄等に就き取略して拾ふ」（『論第一巻尋思鈔』十四丁表（奥書に相当）、龍谷大学蔵）。この「取略拾」を蔵俊の『菩提院抄』（『変旧抄』・『問答』）の文を取って略してそのまま記すというように受け止められなくもないが、奥書全文から見れば『尋思鈔』作成のための手本としている文言に変わりはない。なお全文翻刻は楠淳證著『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―仏道篇―』六四～六五（法蔵館、二〇一九年七月）及び『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』一八五～一八六がある。

㊶『同学鈔』巻一―七（大正六六・六七下～六八下）では本論義テーマを含め「真智平等」・「仏所得法」の三論義を別立てて論じており、『尋思別要』では

本論義テーマと「仏所得法而皆得」を挙げている。但し『尋思鈔』の文集（資料集）的位置にあると見て差し支えない『本文抄』巻一―四（大正六五・四三七下～四三八中）では本論義テーマのみの資料が提示されるだけである。その目次には「等覚名事」とあり、本文は「問。契經中以金剛心菩薩名等覺云云爾者燈師何釋之乎」（註⑰参照）で問答が始まっている。

六、附『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究―「別要」教理篇上』校正漏れ修正

ここでは筆者が編集（執筆含む）を担当した箇所のみに限定したい。本稿論義テーマ「無間解脱同断一障」については本稿での引用はすべて修正した字句としている。なお、脱稿後新たな箇所が見出された場合は、適切な時期に対応したい。

・二五三頁上段末
「唯識論尋思鈔十三冊　善通寺蔵（旭雅写）」→「追加」
・八六六頁（注26）
「大谷本『大乗義章』」→「大谷本・『大乗義章』」
・九〇二頁十行
「この世界では後導師の入滅後は」→「この世界では入滅後導師は」
・一一五四頁四行、一一五七頁二行
「末」→「末」
・一一五三頁十一行
「*或本」→「*文或本」
・一一五六頁九行
「未見文」→「「未見文」」
・一一六〇頁十五行、一一六三頁六行
「がある」→「がある（愚見）」
・一一六二頁六行
「末云には」→「「末云」には」
・一一六三頁三行～四行
「金剛心以前には～理に至るため」→「削除」
・一三一五頁六行
「第四頁」→「第四項」
・一三一六頁五行、十四行
「第六頁、第七頁」→「第六項、第七項」
・一三一七頁七行
「第八頁→第八項」
・一三一八頁四行
「第九頁→第九項」
・一三一九頁二行
「第十頁」→「第十項」
・筆者奥付：
「在東亜的佛教邏輯学之開展―日本因明之特色」→「在东亚的佛教逻辑学之开展―日本因明之特色」（印刷所の都合で正字[繁体字]となっているが、原題は簡体字で記したためここに掲載しておく）
・補筆
書籍内で使用していた『日本古典籍総合目録データベース（Union Catalogue of Early Japanese Books）は二〇二三年三月一日付けで『館蔵和古書目録データベース』（Catalogue of Early Japanese Books at NIJL）・『新日本古典籍総合データベース』（Database of Pre-Modern Japanese Works）と共に『国書データベース』（Union Catalogue Database of Japanese Texts）に統合されている。